

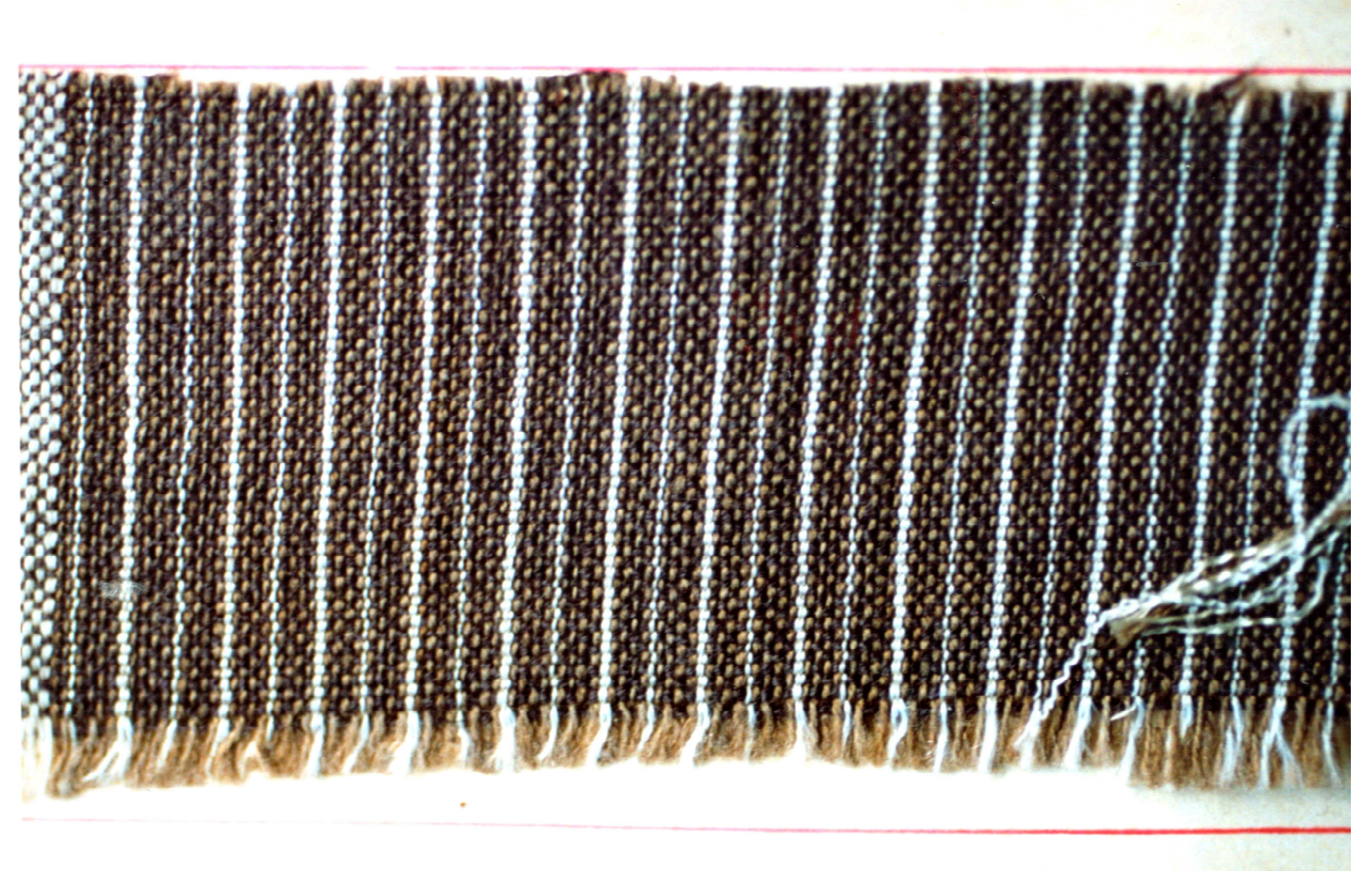
セ ル

セルは毛織物の一種で、セルジ又はセルジスとも云い、「セルはサージ(Serge)をセルジとよみ、其れがセルとなったもの」(広辞苑)、又「セルジをセル地と解してその地を略した語」(日本国語大辞典第2版第8巻)でサージより転訛したもので、経糸に双糸の梳毛糸を緯糸に単糸の梳毛糸を使用し、組織は主として平織であるが綾組織等でも織られ、二巾の梳毛織物で、合着として、着尺地や袴地等に使用された。

糸の使用により本セル(経緯共梳毛糸)、半セル(例えば経糸に綿糸を緯糸に梳毛糸を使用)があり、糸は染糸、空糸、霜降糸、緋糸や綿糸、絹糸等を使用したり、

又捺染等をして、糸使いや加工等により柄物のいろいろなセルが織られ、縞セル、毛緋セル、御召セル、絹セル、綿セル等といい、工場で織られたセルは整理工場にて整理されて各取引先へ出荷された。また大正14年(1925)にはウールラインの名称で冬用にと袷用のセルが織られた。セルは明治末期より尾西地方で織られるようになり、明治28年(1895)頃に当地の人が、輸入された毛織物を着尺用に利用出来ないかと輸入糸を使用して織られたが整理で失敗した。その後、明治31年(1898)から36年にかけて津島の片岡氏が輸入糸を使って、ドイツのセルジを研究し、苦心して成功され、明治39年(1906)

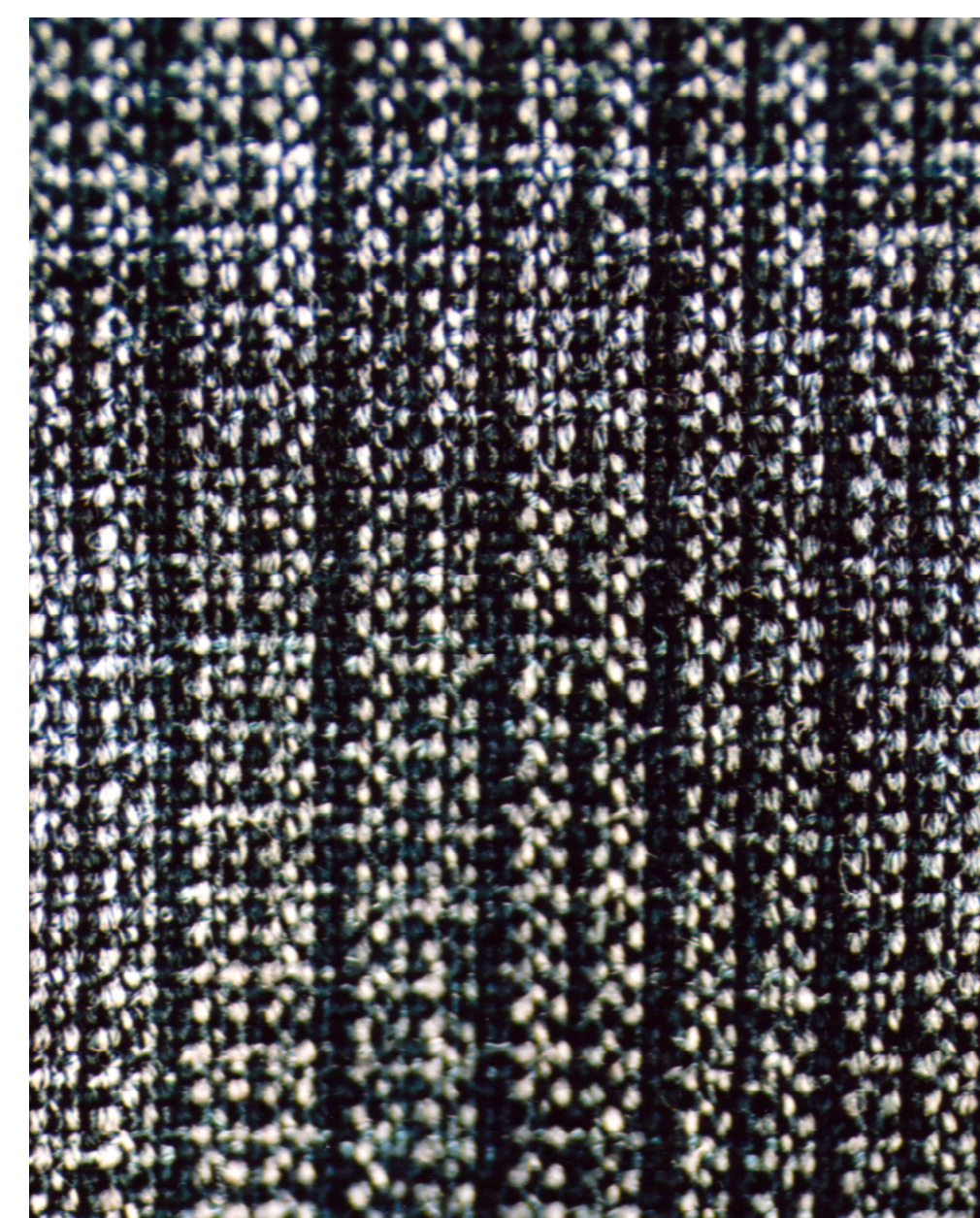
に力織機及び染色整理の機械一式を外国より仕入れてセルを生産された。また一宮市の艶金の墨氏が明治41年に外国より染色整理機械一式を買入れ、セルの染色整理が可能になった。明治期の織機は二巾の手織機で、大正の初期より輸入織機及び国産の豊田式織機等の二巾の力織機が各工場で使用されてセルが織られた。大正期は着尺セルが多く織られたが、洋服地も少し生産されていた。その後、年々洋服地の需要が多くなり、昭和の初期に洋服地の生産に移行した。



明治39年頃のセル(糸入り) (個人蔵)
「糸入り」とは、絹糸のこと



本セルの袴とその袴地の拡大写真(右) (個人蔵)



参考文献：丹羽昇一『織物講話』、森徳一郎『尾西織物史』、玉城肇『愛知県毛織物史』、
日本繊維新聞社一宮支局編『尾西毛織近代史』